一筆啓上！

Smith

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
一筆啓上！

【Ｎコード】
Ｎ７１４７Ｊ

【作者名】
Ｓｍｉｔｈ

【あらすじ】
吸血鬼ミストは人外を嫌う。異邦者を嫌う。
二年前に夜の一族、月村家を殲滅する為に襲撃した彼は、しかし異世界の魔導師達と高町兄妹によって打ち倒された。
深い憎しみを抱いたミストは、復讐するために動き出す。

手紙形式で進むシリアスコメディ。

“始まり”

一月　十五日

前略。

突然の手紙に驚いたかね。

久しぶりだな高町君。

月村の方々も魔導師の方々も、そして高町君も元気にしているだろうか。

君の兄はまだ忍くんと交際しているかね。

それにしても時が過ぎるのは早いものだな。

もうあれから二年経っている。

覚えているかね？

私が万全の態勢で夜の一族を殲滅しにいったあの時を。

あの場に君と、君の友人のアリサ・バニングスが居た事には本当に驚いた。

一般人が二人も、とね。

私達の世界では、関係無いものを巻き込むのはＮＧだったからな。

それが暗黙のルールなのだ。

ルールを破ってしまえば、結果がどうだろうと負けるのは私になる。

定義された「悪」は私になるのだ。

ルールは守る。

だからあの時のみ、私は月村家から手を退いた。
切り掛かってきた恭也君を殴り倒し、銃を突き付けて去った。
だというのに次に訪れた時も君が居て、しかも異世界の技術を利用した魔導師だという。

そして開戦だ。月村とその従者。恭也君。そして君と、月村の次女すずか君を心配した他の魔導師によって、私は吹き飛ばされた。
粉々に。

正直に言おう。
君たちをくびり殺したいほどに憎いが、しかし感謝している。

君たちは私を解放してくれた。
あの時の戦闘で私はいったな？
私は元人間の吸血鬼だと。
だが自由の身ではない、と。

私を吸血鬼にした“親”は、私を実験体として様々な事を行っていた。
成りたての私に力はない。監禁され、多くの苦痛を味合わされた。
身体を束縛され、人形に意志を移され、奴隷となっていた。

君たちが破壊した“私”は、その人形だ。本体は別にある。

だからこそ、感謝するのだ。

人形の死によって私の意識は本体に戻り、何百年も人外と渡り合ったお陰で“親”を越える力を得て……。

そして拘束を破った私は“親”を喰い殺した。
私は力を手に入れたよ高町君。
吸血鬼としてあるべき自由と力をな。
だが、問題はまだある。弱点だ。
“親”を喰い殺し、真の吸血鬼になった私には、それに見合った弱点を背負わされている。
人形に収められていた時も弱点はあったが、それは本体だけだ。
人形の体にはそんな物はなかった。
手紙を書いたのはそのためだ。私はイギリスにいる。日本に言こうにも、流水が私の邪魔をする。
……まったく不便だ。
しかしなあ高町君。打開策が見付かったのだよ。
人間に戻る方法が、この世界にあるというのだ。
そして私の手は、その打開策に届こうとしている。
陽の光は私を祝福し、水の流れは私の穢れを払い、血の欲求は消え失せる。
コウモリにも霧にもなれなくなり、回復力は人と同等になり、不老不死ではなくなる。
しかし。
何百年も培ってきた戦闘技術は残る。身体能力は吸血鬼の時と変わらなくなる。
大手を振って、君たちを排除できるようになる。

なぜそうまでして君たちに執着するか疑問か？
理由は憎しみだけではないからだよ。
この世界をコンピュータに例えるとしよう。そうしたら私はアンチウィルスプログラムとなる。
異界からの侵入者である忌々しき魔導師。人とは外れた魔物。
君たちは、邪魔なのだ。君たちがいるだけで、世界はおかしくなる。
だから殺す。必ずだ。
しかし君たちにもチャンスはやろう。
吸血鬼としての分かりやすい弱点を持った私を、殺すチャンスを。
とある鍵を同封した。私の細やかな感謝の気持ちであり、君たちに与えるチャンスだ。
その鍵は、私の居る城に続く鍵だ。どこでもいいから鍵付きの扉に、その鍵を差し込んで回してみろ。
その先には見慣れない景色があるはずだ。
待っているよ高町君。全力を持って殺してやる。
非殺傷などという甘えは捨ててくることだな。
では、また会おう。元気にしているといい。
敬具。

ミスト・スミス

余談だが高町くん。
日本語は美しいな。
ルーンというものを知っているかね？
この世界に存在する一種の文字魔術だ。日本語と組み合わせてみた。
今頃、月村家にも同じ内容の手紙が届いているはずだ。
そっちの方は読みおわった瞬間に手紙の文字一つ一つが爆弾と化すがね。
無駄だろうが、助けたければ全力で走り給え。

一月　二十九日

一月　二十九日

前略

まず最初に謝っておこう。
すまない高町君。
まさか君の漢字力がそんなにも低レベルだとは思っていなかった。

鍵をつかって城に襲撃してきたとき言っていた、
辞書片手に手紙を読んだ、というのは流石に嘘だと思うが
人を撃ち落とす前に、もう少し勉強したまえ。
と言う訳で、君の漢字力アップの為に遠慮せずに漢字をばんばん使わせていただく。

そう言えば、忍くんたちは結局無事だったようだな。詰めが甘かった。

それにしてもまたもや君たちにしてやられたので、私はいま傷心中だよ。まあ結局はこうして生きているし、人間にも戻れたので万々歳だが。

だからといってこの私が大人しく引き下がると思わないでくれよ？
この借りは絶対に返す。
首を洗って待っていろ。

さて、さっさと本題に入ろうか。

今回は君に頼りたいと思って手紙を書いた。
知っての通り、私は君に二度目の魔砲をぶち当てられて療養中だ。
腕を動かすだけで体がきしむ。
しかし、世にはびこるウジ虫君どもは月村家の方々だけではないので、
奴らは私の体調など気にも留めずにやりたい放題である。忌々しい。

つい最近にも、日本の片田舎にウジ虫が現れたようだ。
聞けば村一つが消滅したらしいね。もちろん村人は全滅だろう。

なぜそんな所に出没したのかは知らんが、放っておけば被害は瞬く間に拡がる。
しかし、直ちに殲滅と行きたい所だが、
私はどこかの漢字力低レベルの娘っ子のお陰でベッドの上から動けない。

だから責任を取って君が行け。
私のような存在は他にも居るが、すぐに日本へ向かえる人材は君たち以外居ないからな。

……まさか断りはしないだろう、なのは君。
数日前の城でも、二年前のあの時も、魔導師や夜の一族を救うために君は私の前に立った。

そんな君が、よもや同じ世界の同じ人間を救う事は出来ないなどと言う理由はないよな。

君には虫酸が走るよ。
私に対して、開口一番で「話し合おう」と言った君が。
あの場で未だ非殺傷に拘った君が。

だが正直に言えば、私は君に乱されている。
私の思想が、君の甘さに喰われかけている。
だから試させて頂こう。　問題のウジ虫君は、最近になって名を馳せてきた夜の一族の暴走体。
力も結構な強さだ。
それを見事に打ち倒せ。果たせた時は、君たちに二度と襲い掛かりはしないと約束してやる。

……“今の私”が生きるために、全霊で君の死を願う。

―――思う存分話し合ってきたまえよ。
そして自分がどれほど甘い事を言っているか、自覚したのち死ぬが良い。

では、今日はここまでだ。
現地に続く鍵は同封してある。精々気をつける事だ。

敬具。
ミスト・スミス

甘っちょろい高町なのは君

追伸。

あの城は元々“親”の城でね。
目障りなので粉々に吹き飛ばすから、前に渡した鍵は捨てたまえ。

死にたくなければ、この手紙を読んでも怒鳴り込んでこないように。
扉を開けたらその先は爆炎だった、というのがお好きなら止めはしないが。

一月　二十九日（後書き）

今回は凄く短い……。
次はもう少し頑張ろう。
にしても拙い文章だなあ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7147j/

一筆啓上！

2010年10月11日05時52分発行